

こんな体験があります。中学二年の初めに学力診断テストがありました。その学校に転任したばかりでいきなり学年主任を任された私は、昨年度の状況にうかつたのですが、テスト結果を見て、学年の生徒の数学の偏差値だけが低いことに気がつきました。そこで何気ない気持ちで数学の先生に尋ねてみました。

その先生は1年生の時に生徒達を教え、今年も持ち上がった2年生全クラスの数学を担当するベテランの講師の先生でした。私の指摘にその先生は、数学だけ成績が悪いことを自分の落ち度であると感じたらしくて、そのテスト結果にとてもショックを受けたようでした。

そして一年たって2年生が終わり、その先生は転任していきました。ところが3年生になった生徒達の学力診断テストの結果を見て驚きました。数学の偏差値が5教科で最高の結果だったのです。

私はその先生のことを思い返しました。あの先生はあれこれと意見をめぐらしたに違いありません。自分の教科だけ偏差値が低い。これは「自分の教え方に問題があったのではないか」そう考えたのでしょう。生徒の能力に責任転嫁できません。そしてその先生は以前にも増して熱心な指導を開始しました。特にできない生徒に対して丁寧な指導が続きました。授業後の居残り補習やノート点検、教材づくりから、昼休みには教室まで出向いて質問に答えていました。

「生徒達の成績が悪いのは私の教え方に問題があるのだ」という思いがその先生の熱心な指導の背景にあったことは間違いありません。そして数学の成績は他の教科をしのいで最高になりました。

しかし、その先生は、その結果を知ることなく転任していきました。

私にはちょっと苦い思い出です。

教育の効果はテストの点数で測れるものばかりではありませんが、先生の熱心な指導で生徒の学習成績が上がることは疑いの余地がありません。

では先生の熱心な指導を促す要因は何でしょうか。

学校でも教員評価制度が導入され、その評価の善し悪しを先生の賃金に反映させようという試みもあります。成果を上げた教師とそうでない教師の賃金に差を付けることで教師の勤労意欲を引き出そうということのようですが、賃金目当て頑張っている先生はおそらくいないのではないのでしょうか。

ただ、生徒たちができるようになっていく姿を見たくって、もっとわかるように教えたいとか、つまずいた生徒を援助したいとか思うものです。そして期待通りの成果が見られないとき、その結果について時に、「この学校はもともと勉強嫌いの生徒が多いのだ」と原因を生徒の方に見つけようとすることはありますが、最後は「自分の教え方のどこかに問題があったのではないか。」と自己反省をめぐらすものです。

しかし個々の生徒を見たときに、学習意欲や理解力には個人差があります。そしてその個人差を理由に「この子はこの程度だ」と「伸びしろ」を決めて指導していることはないとは言えません。熱心な指導で生徒の学力が大きく伸びるのであれば、「伸びしろ」を決めて指導するのは正しくありません。